福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

教員免許更新講習「バレーボールの指導法」における受講者の関心及び講習に対する評価

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2013-07-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲垣, 良介, INAGAKI, Ryosuke メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/7595

福井大学教育実践研究　2012，第37号，pp.11－17

実践論文

教員免許更新講習「バレーボールの指導法」における受講者の関心及び講習に対する評価

福井大学教育地域科学部　稲　垣　良　介

本稿は，平成24年福井大学教育地域科学部において行われた教員免許状更新講習「バレーボールの指導法」について，受講者の関心と講習（講義・実技）への評価をもとに検討した。その結果，①受講者の資料への関心は概して高いものであったこと，②指導歴の有無により指導案，内容適度，討論時間の3項目に有意差（有意傾向）が見られたこと，③競技歴の有無により内容適度，指導応用の2項目有意差（有意傾向）が見られたこと，④実技に関する項目では，指導歴及び競技歴の有無別において，有意差（有意傾向）の見られる項目はなかったこと等を明らかにし，今後の課題を見出した。

キーワード：教員免許状更新講習，バレーボール，指導歴，競技歴

１．はじめに

本稿は，平成24年度福井大学教育地域科学部において行われた教員免許状更新講習「バレーボールの指導法」における受講者の関心と講習（講義・実技）への評価について受講者から得られた評価をもとに検討し，まとめたものである。

２－１．講習のねらい

講習のねらいは「中学校体育におけるバレーボールでいわゆる三段攻撃が必然として行われるゲームを行うことができるようにさせる指導法」である。以下，受講者が講習選択時に閲覧する福井大学教員免許状更新講習概要記載の講習のねらいを抜粋する。「バレーボールの指導法に関する講習である。主に中学生に対する授業を想定して講義及び実技を行う。バレーボールの発生とその特徴を理解すること，学習者に基本的なスキルを身につけさせるための練習法とその要点を，実技を通して修得することを目的とする。また，通常のバレーボールだけでなく異なるボールを用いたゲームを通してそれぞれの特徴にも触れる機会を設ける。小・中学校教諭を主な対象とするが高校教諭でも受講可能。」どちらかと言えばバレーボールの指導を不得手とする教員に向けたねらいの設定であった。

２－２．講習の概要

講習の日時，場所，受講者は下記の通りであった。

・日時；平成24年6月23日　9：30 ～ 16：30
・場所；福井大学文京キャンパス教育系1号館3階301号室及び第一体育館
・受講者；26人（30歳代9人，40歳代11人，50歳代6人）

講習は，教室で講義及び体育館で実技を行った。午前の前半を講義，後半を実技，午後は実技（含：試験，アンケート調査）を行った。内容は，①キャッチバレーボールの映像の視聴及び意見交流，②最近の学校体育における諸言説及び教材としてのバレーボール解釈に有益と思われる歴史や発生，ルール（の変遷），指導要領の記述等に関する講義であった。また，現場で生きる資料としてソフトバレーボールの指導細案等を記載した内容について説明を行った。実技は午前の後半，午後からの後半に行った。内容は，①異なる条件下のバレーボールの特性に触れ，②バレーボールの基底技能の指導のポイントについてグループごとに練習させた。講習の概要を時系列にまとめたのが表1である。

２－３．受講者について

講習を提供するにあたって，学校体育におけるバレーボールの指導に初歩的な疑問や課題を有する教師，さらには自身がバレーボールを「苦手」とする教師を当初想定した。「小中連携」の要請に応えるべく募集要項には主な対象者を小・中学校教諭とした。実際は，勤務校種別に小学校6名，中学校10名，高校9名，養護学校1名の計26名（内4名は県外より受講）であった。また，保健体育専門とする教師19人，他教科を専門とする教師7名であり，この7名の受講動機は小学校での体育指導に加え，部活動でのバレーボールの指導に関するものが含まれた。受講者のバレーボールの指導歴・競技歴は，部活動を含む指導経験を有する者11人，指導歴のない者14人であり（1人は不明），競技歴を有する者10人，指導歴のない者16人であった。これら受講者の経歴は，バレーボールの指導が「苦手」である小・中学校教諭を想定した筆者の予想に反した。

これは，①バレーボールの経験者が数多くの講習の中から「バレーボールの指導法」を選択するのは自然であり，つまりは当方の認識不足が招いた結果であること，

表1．講習の概要

時刻	主な内容（破線以下は用いた資料・用具を示す）
～9：30	受付（講義室）
9：30	講師挨拶，受講者自己紹介，日程・講習内容説明，筆者の立場
9：45	・キャッチバレーボールの意図を理解する
	・資料　指導案
9：50	・最近の教育言説に触れる　解説及びキャッチバレーボール視聴
	・キャッチバレーボールのDVD視聴（練習約5分，ゲーム約10分） ・資料　指導案
10：10	・問題意識の交流，課題を共有するための意見交流 キャッチバレーボールの映像視聴を突破口に，さまざまなバックグランドを有する4～5人の小グループ別に自由に意見交流する。 （全てのグループに教師歴，バレーボール指導歴，男女，専門教科がほぼ均等になるよう意図的にグルーピングした。なお，終日このグループを単位として講習を行った。）
	・資料（交流にあたってどの項を参照するかの指示なし。）
10：30	・最近の教育言説の解説 主に内容論を柱に，方法論・総合的課題について理解する。 ・バレーボールの教材化に資する解説
	・資料　バレーの歴史（発生）に関する資料 バレーのルールに関する資料 指導要領の位置づけ，年代別指導要領の資料　教師のライフステージに関する資料 体育の技能・局面学習に関する資料　授業でのルール変更に関する資料 キャッチバレーボールの学習指導案　ソフトバレーボールの学習指導案及び学習カード
	実技講習体育館
11：30	・準備運動，アイスブレーキング（2人以上で行うコミュニケーション促進を促す軽運動） 「あんたがったどこさ」「背中合わせ立ち」
11：40	・さまざまな条件下でのゲーム特性に触れる 4対4ミニコートでゲーム 2種類のボール，バウンドの有無・返球回数を変えたゲーム
	・バドミントンコート3面　ネット高2m ・小学校教材用ソフトバレーボールモルテンKVN100（円周77～79㎝，重量90～100g） ・ソフトバレーボールモルテンS3V1200-C（円周77～79㎝，重量200～220g） ・バドミントンコート3面　ネット高2m
12：00	昼食
	実技講習体育館
13：00	・準備運動，仲間との信頼関係の醸成 「お地蔵さん遊び」「トラスト・フォール」
	およそ1m高の台
13：20	・オーバーハンドパスの指導法 落下点への移動，構えづくり，ボールタッチ，対人パス，円陣パス，直上で移動，二段トス，トスなどさまざまな練習のポイントを解説しながら実習。
	・6人制バレーボールコート　2面ネット高2m10㎝ ・バレーボール5号球モルテンV 5M5000・ミカサMVA200（円周65～67㎝，直径21㎝，重量260～280g）
14：00	・アンダーハンドパス（サーブカット）の指導法 構えづくり，面への意識，左右の動き，対人パスなどさまざまな練習のポイントを解説しながら実習。
	・オーバーハンドパスの指導法と同様の用具に加え2m×0.6mの長板
14：30	・スパイクの指導法 スイングの仕方，ヒットポイント，ミート，空中姿勢，着地，セミスパイクなどさまざまな練習のポイントを解説しながら実習。
	・オーバーハンドパスの指導法と同様の用具に加えポートボールの台4台を使用
15：00	ゲーム
	・バドミントンコート3面　ネット高2m ・軽量バレーボールモルテンV 5M3000-L（円周65～67㎝，直径21㎝，重量220～240g）
15：45	講習のまとめ，試験

※破線以下は，その時間帯の活動に用いた用具等を示す。
※午後からの実技の途中1回約10分間給水の為，休憩を挟んだ。

②日常多忙な教師が講習名のみを見て講習を選択した結果であり，いちいち目標・ねらいを読んでいないからのどちらかなのだろう。

いずれにせよ，受講者による講習に対する要望（福井大学教員免許状更新講習事前アンケート）には，明らかに本講習に明記されたねらいから逸脱するものが散見された。講習冒頭において受講者に対し，これらに対しては，応えられないことを率直に述べた。そして，基本的に従前より準備した内容，すなわち中学校の指導レベルを基本とする講習内容を変更しなかった。それは，当初の想定通りシラバスに明記された内容を期待する受講者が少数でも存在するからであった。また，指導経験豊富な受講者にとってもバレーボール授業に対する今日の内容論的課題を提供することは有益だと考えた。ただし，受講者には某県の選抜チームの監督が（少なくとも）3人含まれた。この3人は，競技としてのバレーボールにおける技能指導における熟練者と判断した。よって，受講者全体に彼らを紹介し，前半の講義における討論や後半の実技では適宜助言を求めることを勧めた。講習のねらいを逸脱する要望に綴られた事項について，受講者同士の交流や討論を通して解決したり，解決への糸口を見つけたりすればよいと考えたからであった。

3－1．アンケート調査について

講習の最後に，受講者の関心，講義・実技への評価を得るためアンケート調査を行った。受講者の関心は，講習で用いた筆者作成の資料に対する「参考になった程度」から探ることとした。アンケート実施前に「資料は今後の講師自身の講習の改善資料としてのみ用いること」を告げ，集合調査法で行った。

資料の関心に関する質問項目は，講習当日配布した資料[注1]（全34頁）内容に沿った8項目（項目1；バレーの歴史（発生）に関する資料（1頁），項目2;バレーのルール（原典・変遷）に関する資料（5頁），項目3；指導要領の位置づけ，年代別指導要領の資料（6頁），項目4；教師のライフステージに関する資料（1頁），項目5；技能・局面学習に関する資料（5頁），項目6；授業でのルール変更に関する資料（5頁），項目7;キャッチバレーの学習指導案（2頁），項目8；ソフトバレーボールの学習指導案及び学習カード（9頁））であった。

講義と実技に対する評価に関する質問項目は，理解度（項目9及び14），時間適度（項目10及び15），内容適度（項目11及び16），指導応用（項目13及び17）であり，講義のみ討論時間（項目12）を加えた。

資料への関心に関する質問には，5段階評定尺度（5：参考になる　4：まあ参考になる　3：普通　2：あまり参考にならない　1：参考にならない）を用いて回答を求めた。講義と実技に対する評価に関する質問には，5段階評定尺度（5：思う　4：まあ思う　3：普通　2：あまり思わない　1：思わない）を用いて回答を求めた。いずれも，基本的に5に近いほど講習のねらいに迫ることを示す。ただし，項目10，12，15は，「○○の時間が長い」と質問した（反転項目）。

受講者26人のうち，1人の記述に不備が認められた。よって25人を分析対象者とした。

3－2．分析方法

分析にあたっては，受講者全体の各項目に対する平均及び標準偏差を算出した。また，指導歴，競技歴の有無による相違を見出すため，各項目に対する平均及び標準偏差を算出した。平均の差の検定は，対応のあるデータは対応のあるt検定，対応のないデータはF検定を行い，分散に有意差が見られた項目は異分散t検定をそれ以外は等分散t検定を行った。指導歴は，受講者の内7名が保健体育科以外を専門としていたためバレーボールの指導歴とした。指導歴有りの平均指導歴は11.91年（SD＝11.19）であった。競技歴は，自身が部活動，クラブ等のチームで専門的に競技を行った経験の有無による。競技歴有りの平均指導年数は8.40年（SD＝6.87）であった。競技･指導歴とも経験年数にばらつきが大きい。これは，例えば50歳代の受講者の指導歴が30年以上の場合があるのに対して30歳代のそれが最小で2年等の理由による。指導歴，競技歴ともに経験年数は短くても経験のない場合とは区別すべき捉えたこと，また，対象者数が限られていることからこれ以上条件別に分析するのは得策でないと判断したため経験の有無2条件で分析した。指導歴有り11人の内，競技歴を有さない対象者は4人，逆に指導歴なし14人の内，競技歴を有する対象者は3人であった。

4－1．結果と考察

表2は，資料への関心及び講義，実技に対する評価について各項目の平均及び標準偏差をまとめたものである。

まず，資料に関する関心では，8項目とも高い関心をもっていることが分かる。平均を100分率に換算すれば，全項目で85％以上という結果であった。3．指導要領，7．指導案は平均（91.2％）が最も高い。ここでの指導要領とは，ネット型球技の技能に関する記述を時系列に説明した資料であった。また，指導案とはキャッチバレーボールの指導案である。日々の授業での一定の拠り所である指導要領の記述や直近の指導要領に基づいて行われた最近の実践例への関心が高い。しかし，8．指導案（ソフトバレーボールの指導案・学習カード）の平均（87.2％）は，資料サイズ（A4，9頁）において7．指導案の4倍以上であったが7．指導案（A4，2頁）のそれを上回ることはなかった。キャッチバレーボールの指導案は，講義中にビデオで視聴する機会を設け，授業者の意図を丁寧に説明したのに対し，ソフトバレーボールのそれは明らかに説明不足であった。筆者の意図は，キャッ

表2. 項目ごとの平均及び標準偏差（全体）　n＝25

区分	項目	平均	SD
資料	1.歴史	4.36	0.91
	2.ルール	4.32	0.80
	3.指導要領	4.56	0.71
	4.教師関心	4.32	0.75
	5.技能・局面学習	4.48	0.65
	6.ルール変更	4.36	0.64
	7.指導案	4.56	0.65
	8.指導案	4.36	0.86
講義	9.理解度	4.84	0.37
	10.時間適度	2.08	1.15
	11.内容適度	4.56	0.71
	12.討論時間	2.20	1.04
	13.指導応用	4.44	0.58
実技	14.理解度	4.64	0.76
	15.時間適度	2.04	1.02
	16.内容適度	4.44	0.71
	17.指導応用	4.40	0.71

※1キャッチバレーボールの学習指導案
※2ソフトバレーボールの学習指導案及び学習カード

チバレーボールだけを流布するつもりはなく，他の優れた実践例を示すことをねらったが，これは具現できなかった。これはまた，10年以上の教職経験者に単に‘授業の展開例’のような資料を用いることを戒めることを示すのであろう。最近の言説として載せた5. 技能・局面学習の平均（89.6%）は，比較的高値であり関心の高さが伺われた。2. ルール（86.4%），6. ルール変更（87.2%）は，教材としてのバレーボールの本質を理解するにふさわしいとの見立てであった。2. ルールはバレーボールの原典と言われる13のルールを示す。6. ルール変更はめまぐるしく変容するバレーボールのルール変更とその背景を示す。本来であれば，他の項目に比して高い値を期待したが，そうはならなかった。教材理解が肝要であることを踏まえた上で，本質を理解するための資料としてより丁寧に講義すべきであった。

次に，講義に対する評価についてである。9. 理解度（96.8%）が高く，11. 内容適度（91.2%）を上回り，続いて13. 指導応用（88.8%）であった。この値を評価するため年代別の分布を見たところ，30歳代の評価に比べ，40歳代のそれが厳しい傾向であることが分かった。5段階で5と記した人数は，9. 理解度は5が9人（90.0%）であったが11. 内容適度5人（50%），13. 指導応用3人（30%）であった。30台では11. 内容適度7人（77.8%）であり13. 指導応用6人（66.7%）であった。40歳代は方法論的課題よりも内容論的課題に関心が向かうと思われる。講義では意図して内容論的課題を取り上げた訳だが，40歳代の評価は期待に添わなかった。40歳代は，個別的な課題への関心が高まり，各々の課題が明確である可能性がある。したがって，一方的な講義は受講者のニーズに応えられない可能性があると解釈した。10. 時間適度(41.6%)，12. 討論時間(44.0%)は，受講者の事前の要望に「時間配分に留意してほしい」旨の要望が見られたため聞いた項目である。結果は，評価の分かれるところであるが，「～の時間が長い」の問いに対して，思わない，あまり思わない，普通までの回答をよしとすれば，11. 時間適度，12. 討論時間ともに25人中24人に達することから，概ね良好と考えられた。受講者の事前の要望（時間配分の留意の中身）には，「実技に特化されるとつらい」「講義は短くして欲しい」のように相反する要望が散見された。基本的には，講習のねらいに沿って，講習提供者が判断し，受講者はその意図を汲み受講せざるを得ない。また，結果としていずれの要望に対しても一定の評価が得られることが本講習において具現されている。

続いて，実技に対する評価についてである。結果は，14. 理解度（92.8%），16. 内容適度（88.8%），17. 指導応用（88.0%）であった。既述のごとく受講者の指導経験，競技経験はさまざまである。こうした中で比較的評価が高かったのは，グループ内での教え合いの為グループ間等質としたことが挙げられる。また，積極的にグループ内でのコミュニケーションを図るよう口頭で促すことに加え，準備運動で身体接触を伴う軽運動（アイスブレーキング）を意図して行った。結果，講師の示す指導のポイントを受けて受講者同士の教え合いが有効に機能したと思われる。この3項目中，評価2（あまり思わない）以下としたのは40歳代の1人であり11. 理解度における評価において2とした。それ以外は全3項目，全年代で3以上であった。そこで，この1名の「バレーボールの指導において留意すべき諸点を述べなさい。」という自由記述の項目を探った。すると，この受講者は，学校体育からネット型球技やバレーを無くし，技術的な要素の必要のない種目を教材として扱うべきであるとの主張の持ち主であった。15. 時間適度（40.8%）は講義に対する11. 時間適度同様25人中24人が思わない，あまり思わない，普通であった。よって概ね良好と考えた。

次に，指導歴，競技歴の有無による相違についてである。

表3は，競技歴及び指導歴の有無別に資料への関心及び講義，実技に対する評価についてまとめたものである。指導歴の有無によって有意差（有意傾向）が見られたのは，7. 指導案，11. 内容適度，12. 討論時間の3項目であった。資料に関する関心では，7. 指導案の項目に有意傾向が見られた。7. 指導案は，キャッチバレーボールの指導案であった。指導歴のない受講者のほうが指導歴のある受講者よりも関心が高い傾向である。指導歴のない受講者の方が最近の実践がどのように行われるか関心を示す。ただ，指導歴ありの平均（85.4%）についても関心が低いと断じるほどではない。指導歴をバレー

表3. 項目ごとの平均及び標準偏差及び検定結果（競技歴，指導歴の有無別）

区分	項目	競技歴あり n＝10		競技歴なし n＝15		t値	指導歴あり n＝11		指導歴なし n＝14		t値
		平均	SD	平均	SD		平均	SD	平均	SD	
資料	1.歴史	4.60	0.70	4.20	1.01	1.08ns	4.18	0.87	4.50	0.94	0.87ns
	2.ルール	4.40	0.84	4.27	0.80	0.40ns	4.18	0.87	4.43	0.76	0.76ns
	3.指導要領	4.60	0.70	4.53	0.74	0.23ns	4.45	0.69	4.64	0.74	0.65ns
	4.教師関心	4.20	0.92	4.40	0.63	0.65ns	4.18	0.87	4.43	0.65	0.81ns
	5.技能・局面学習	4.40	0.70	4.53	0.64	0.49ns	4.45	0.69	4.50	0.65	0.17ns
	6.ルール変更	4.30	0.67	4.40	0.63	0.38ns	4.27	0.65	4.43	0.65	0.60ns
	7.指導案※1	4.30	0.82	4.73	0.46	1.52ns	4.27	0.79	4.79	0.43	1.95†
	8.指導案※2	4.40	0.70	4.33	0.98	0.19ns	4.27	0.79	4.43	0.94	0.44ns
講義	9.理解度	4.80	0.42	4.87	0.35	0.43ns	4.73	0.47	4.93	0.27	1.27ns
	10.時間適度	1.90	0.99	2.20	1.26	0.63ns	2.00	1.00	2.14	1.29	0.30ns
	11.内容適度	4.20	0.79	4.80	0.56	2.23*	4.18	0.87	4.86	0.36	2.68*
	12.討論時間	2.30	0.95	2.13	1.13	0.39ns	2.73	0.65	1.79	1.12	2.63*
	13.指導応用	4.20	0.63	4.60	0.51	1.75†	4.27	0.65	4.57	0.51	1.29ns
実技	14.理解度	4.90	0.32	4.47	0.92	1.69ns	4.73	0.65	4.57	0.85	0.50ns
	15.時間適度	1.90	0.99	2.13	1.06	0.55ns	2.27	1.01	1.86	1.03	1.01ns
	16.内容適度	4.40	0.70	4.47	0.74	0.22ns	4.36	0.81	4.50	0.65	0.47ns
	17.指導応用	4.40	0.70	4.40	0.74	0.00ns	4.36	0.81	4.43	0.65	0.22ns

*p<0.05　†p<0.10

ボールの指導歴としたため，この中に占める体育授業の指導歴を有する人数をみておく。指導歴を有する者11人中7人，指導歴なしの者14人中13人が体育の授業歴があった。しかし，顕著な傾向は見られなかった。11. 内容適度，12. 討論時間は講義に関する項目であった。講義内容は指導歴のない受講者のほうが指導歴のある受講者より適切であったと感じている。これは，当初バレーボールの指導が苦手な受講者を対象とした本講習のねらうところであったから，それが一定程度具現されたと思われる。指導歴なしの内訳は，2人が4（まあ参考になった），12人が5（参考になった）とした。しかし，当然のごとく指導経験のある受講者のニーズにも応えるべきことが課題である。13. 討論時間は，指導歴のない受講者ほど長いと思っていない。討論を通じて指導歴を有する経験者から有益な知識を得ているのであろうと考えられる。逆に言えば，指導歴ありの受講者はなしの受講に比べて時間が長いと感じている。討論の方向性によっては新たな知識や課題解決へのヒントを得にくいからであろう。経験豊富な受講者に対する討論ではテーマを絞り込む等の工夫がいるのであろう。実技に関する4項目に，有意差（有意傾向）はなかった。

競技歴の有無によって有意差（有意傾向）が見られたのは，11. 内容適度，13. 指導応用の2項目であった。11. 内容適度，13. 指導応用ともに講義に関する項目であった。講義内容は競技歴のない受講者のほうが適切であったと感じている。これは，指導歴の有無と同様の傾向であった。競技歴のない受講者により適する内容であったことは，当初想定したねらいに沿った結果である。また，13. 指導応用は競技歴のない受講者の方が競技歴のある受講者より講義内容を今後の指導に生かせると考えていることを示す。これについても当初想定したねらいに沿った結果であった。同時に今後は競技歴のある受講者に対しても有益な内容を準備する必要があることを示す。実技に関する4項目に，有意差（有意傾向）はなかった。

4－2．問題提起

筆者は，教員免許更新制に対して両手を挙げて賛成するわけでない。例えば，教育委員会が実施する研修との関係や内容の整合性に関すること，講習提供機関（者）が現職教員や社会の要求に合致した講習を提供できるかということ，教師の経験年数によって関心や身に付けるべき資質は異なるゆえに現行は非効率ではないかということ，資質向上に資する研修は内発的な動機付けに基づき自主的に行われるのが理想であること等，疑問を持つからである。

一方，今後の教員大量（定年）退職に直面することに伴う同僚による校内伝承の弱体化に対する手段として有効，といった具合に諸々データにより制度を正当化させる言説が公表されるに違いない。現職教員にしても制度が存在する以上，異を唱えるより，現行に身を任せ，「講習による成果」を適当に作成しておく方が得策と考える

であろう。また，その他諸要因によりしばらくこの制度が存続しそうである（注2）。

本稿はこうした問題意識を持ちつつ，受講する現職教員のニーズに応えたいと考える多数の講習提供者の一人として検討を加えた。

5．まとめ

・受講者の資料に関する関心は，バレーの歴史（発生）に関する資料（87.2%），バレーのルール（原典・変遷）に関する資料（86.4%），指導要領の位置づけ・年代別指導要領の資料（91.2%），教師のライフステージに関する資料（86.4%），技能・局面学習に関する資料（89.6%），授業でのルール変更に関する資料（87.2%），キャッチバレーの学習指導案（91.2%），ソフトバレーボールの学習指導案及び学習カード（87.2%）であり，いずれも85%以上の値であり，概して高い関心を示した。

・受講者の資料に関する関心のうち，8．指導案の平均（87.2%）は，資料サイズ（A4，9頁）では7．指導案（91.2%）の4倍以上であった。10年以上の教職経験者‘授業の展開例’のような資料を用いる際は意図を丁寧に説明することが肝要である。

・2．ルール（86.4%），6．ルール変更（87.2%）は，教材としてのバレーボールの本質を理解するにふさわしいとの見立てであり，他の項目に比して高い値を期待したが，結果は異なった。教材の本質を理解するための資料であることから，より丁寧に講義すべきであった。

・講義に対する評価は，9．理解度（96.8%）が高く，11．内容適度（91.2%）を上回り，続いて13．指導応用（88.8%）であった。年代別の分布から，40歳代への一方的な講義はニーズに応えられない可能性があると解釈した。

・実技に対する評価は，14．理解度（92.8%），16．内容適度（88.8%），17．指導応用（88.0%）であった。受講者同士の教え合いが有効に機能したと思われる。

・指導歴の有無によって有意差（有意傾向）が見られたのは，7．指導案，11．内容適度，12．討論時間の3項目であった。指導歴のない受講者の方が最近の実践がどのように行われているのか関心を示した。講義内容は，指導歴のない受講者のほうがより適切であったと感じている。13．討論時間は，指導歴のない受講者ほど長いと思っていない。討論を通じて指導歴を有する経験者から有益な知識を得ているのであろう。

・競技歴の有無によって有意差（有意傾向）が見られたのは，11．内容適度，13．指導応用の2項目であった。講義内容は競技歴のない受講者のほうが適切であったと感じている。また，13．指導応用は競技歴のない受講者の方が競技歴のある受講者より講義内容を今後の指導に生かせると考えていることを示す。

6．課題

本稿では，受講者の関心，講義・実技への評価について，受講者全体の平均から評価の傾向を探った。また，指導歴，競技歴の有無による相違から，有意差（有意傾向）の見られる項目を明らかにした。しかし，年代別あるいは教師経験別の傾向が分からない。これは，対象者数の問題からであった。補うべく，年代別に度数を考察の際に参照したがこの点不十分である。

最大の課題は，本稿で明らかになったことを元に，講習内容を改善し，次回（あればの話）は少なくともより受講者のニーズに応える講習としたい点である。

・注

（注1）資料作成にあたっては，参考文献（1）～（7）を用いた。この内，項目3；指導要領の位置づけ，年代別指導要領の資料は，主に技能に関する記述について，例えば「中学校指導要領解説保健体育科編（2008）文部科学省」等から筆者がまとめた資料である。技能に関する変遷を中心に，昭和26年までを遡ってまとめた資料である。項目6；授業でのルール変更に関する資料は，筆者が平成24年5月に体育教材研究受講生50名に対し，「これまでの授業で経験したバレーボールのルール変更とその感想」を記述させ，これを元に，ルール変更については「接球数」「人数」等10項目に分類した。感想については代表的なものを筆者が選択し，小・中・高等学校に分け記述のまま記載した資料。

（注2）第81回中央教育審議会（平成24年7月23日開催）「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申（案））」によると，「教員免許更新制については，適切な規模を確保するとともに，必修領域の内容充実，受講者のニーズに応じた内容設定等講習の質を向上するなど，必要な見直しを推進する。」とされる。

・参考文献

（1）澤崎弘英（2010）「心をつなぐキャッチバレー学習指導展開案」平成22年10月福井大学教育地域科学部附属中学校授業研究会資料

（2）水谷豊（1995）「バレーボール　その起源と発展」平凡社，pp35-65

（3）「ステップアップ中学体育」（2009）大修館書店,p172

（4）森勇示（2004）「授業への関心　－基礎的知識と基本的態度－」『体育科教育』大修館書店，pp22-25

（5）佐藤学（2004）「体育における技能の学び」『体育科教育』大修館書店，p14

（6）原祐一（2010）「ネット型ゲームの局面学習」『体育科教育』大修館書店，pp18-21

（7）岩見光洋（2009）「ソフトバレーボール学習指導案」平成21年岐阜市立長良東小学校授業研究発表会資料

Evaluation and interests shown by attendees on a lecture, "Method of Volleyball Teaching", as a part of teaching license renewal course

Ryosuke INAGAKI

Key words：Teaching license renewal course, Volleyball Teaching, Career of teaching volleyball, Career of playing volleyball